

『稲葉
佳景
無駄
安留記』

調査報告

(智頭郡篇)



三角山
● ① 三角山

⑩ 赤松棧道

洗足山
● ② 仙足ヶ嶽

③ 雞ヶ平不動尊

● ⑩ 笹ヶ棧道

⑪ 駒帰阪



はじめに

無駄安留記は、安政五年（一八五八）にいったん成立し、明治九年（一八七六）頃に現在の形になった地誌である。著者は米逸処という商人とされている。現在の鳥取県東部にある因幡国の八郡、邑美郡・法美郡・高草郡・気多郡・八上郡・八東郡・智頭郡の景勝地や旧跡などについて本文、絵、作者の和歌や狂歌が記載されている。

今年度は、因幡国東部に存在した智頭郡について調査を行った。智頭郡とは、現在の鳥取市用瀬町、鳥取市佐治村、智頭町にあたり、明治二九年（一八九六）に智頭郡は八上郡・八東郡と合併して八頭郡となった。調査方法は、本文と絵、狂歌、和歌の解読と現地調査、『因幡志』などのほかの地誌との比較を行った。

報告する名所は智頭街道に沿って存在し、著者は智頭街道を通って名所をまわっていたことがわかる。智頭街道は江戸時代に整備された街道の一つで、播磨国姫路（兵庫県姫路市）を始点として、因幡国鳥取（鳥取県鳥取市）に至る道である。私たちは、その道を実際に歩き、著者が訪れた名所を調査し、著者と同じ風景を眺めた。一五五年前の著者が見た風景とは少し変わってしまったかもしれないが、時間を超えて、著者が見た風景を感じ取ることができた。この報告書によって、智頭郡の風景や自然を味わって、昔にタイムスリップしたような気持になっていただけなら幸いである。

（寄能 千明）

三角山

無駄安留記本文を、①三角山の登山路・三角山神社、②三角山頂上からの眺め、③三角山を詠んだ歌、と三つの項目に分け、「三角山」について報告していく。加えて、無駄安留記本文には、城跡について触れられてはいないが、挿絵には「城墟」と記されている山が描かれていることから、④城跡についても報告していく。

①三角山の登山路・三角山神社

三角山の登山路の様子や頂上にある三角山神社について、無駄安留記本文には次のように書かれてある。

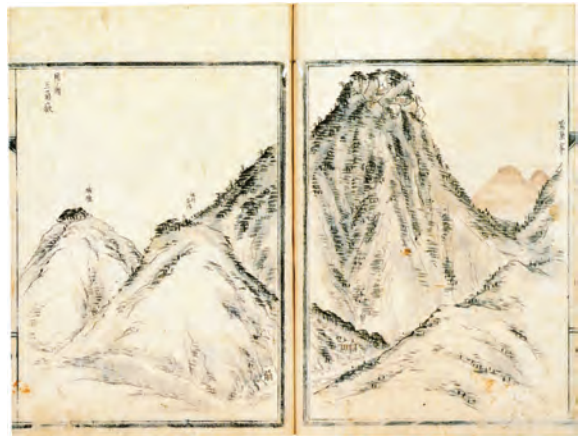
往古は天狗聚住、常に登山かたかりし由。凡谷をゆくこと五六町にして弁天祠あり。夫より舞堂。是より岬づたひして数丁登れば華門。又数丁登れば一ツの峯に到る。少平地にして、休憩、施行場と云。是より山路險阻にして、九折を登れば社頭に到る。大岩覆ひて、或背き又向て、横に負、豎に抱れ、総て岩石を積たる頂に鎮座する神、峯鐸大権現と崇る。岩間老松生て、南の岩壁に倚て籠堂を建る外、寸地も平地なし。

(訳)

遠い昔は天狗が集まって住んでいて、常に登山が難しかったという。お

よそ谷を行くこと五五〇、六五〇メートルのところに弁天祠がある。それから舞堂がある。そこから岬にそって数百メートル登れば鳥居、また数百メートル登れば一つの峯に着く。少し平地になっていて、そこは休憩場で施行場という。これからの山路は険しくて、曲がりくねった路を登れば社頭に着く。大岩が覆っていて、あるいは背中を向けているように見え、横にもたれ、縦にもたれかかっているように積まれ、そうした岩石の頂に鎮座する神は、峯鐸大権現と崇められている。岩の間には老いた松が生えており、南の岩壁によりかかるように籠堂が建っているほかに、少しも平地がない。

「往古は天狗聚住」(遠い昔は天狗が集まって住んでいた)という言葉から三角山についての無駄安留記本文が始まるように、三角山は天狗の山といっても過言でないかもしれない。そんな三角山には、いくつか天狗にまつわる民話が残されている。その中で、特に天狗にまつわる出来事が詳細に述べられている民話があるので、ここで紹介しておきたい。以





下の文章はそのあらすじである。

三角山神社の神主田中主税が、宿願のわけがあつて、享保十一年六月十八日三角山頂上に参上して、神前で十七日の断食をしていた。すると、同月二十三日申刻ばかり、主税が神前で煙草を呑んでいると、目の前に翼をつけた天狗が現れた。天狗はただ主税をしばらくにらみつけて、去っていった。「用ヶ瀬の宝積坊」「因伯昔ばなし 第六集」（編集・発行、鳥取民話研究会（代表鷺見貞雄）、昭和五〇年、五八頁）。

この話の天狗は、おそらく、断食中の神主が天狗＝宝積坊権現が祀られている神社の前で煙草を呑んでいたため、それをたしなめに現れたのであろう。この民話は年月日、神主の名前が明確に記されており、天狗は本当に実在するのだと思える話だといえるだろう。三角山は天狗に見守られている山なのである。

三角山を登り始めて、最初に見えるのは弁天祠である。これは、無駄安留記本文の「凡谷をゆくこと五六町にして弁天祠あり」（およそ谷を行くこと五五〇から六五〇メートルのところに弁天祠がある）に当たる箇所である。弁天祠の祭神は市杵島姫命である。市杵島姫命について詳しく見てみると、市杵島姫命は「アマテラスとスサノオの誓約によって生まれた、いわゆる宗像三女神の一つ」であり、「玄界灘の海上交通を

守護する海の神であったと思われる」（國學院大學日本文化研究所『神道事典』平成六年、弘文堂、五二頁）。さらに、弁天祠とあるので弁天様について、戸部民夫『日本の神々 多彩な民族神たち』（一九九八年、新紀元社、二四〇二七頁）によって調べてみると、弁天様は、大黒様と同様に渡来神であることが分かった。その出自は、インド神話の河神のサラスヴァティという女神で、日本に入ってきたのは奈良時代のことであった。そして、鎌倉時代になると、

在来の神である市杵島姫命と習合した。なぜ、習合したのか詳細な経緯は分からなかったが、両方の神とも美人の女神で水神であったため、習合したのではないかと思われる。こうした、弁天様と市杵島姫命の習合によって、弁天祠の祭神は市杵島姫命となっている。

弁天祠から少し先に行くと女人堂がある。三角山神社は、戦前、女人禁制の神社であった。そのため、女性が参拝できるのはこの女人堂までであり、ここには「女人堂」と彫られた大きな石が建てられている。現在は、女性も頂上まで登っていくことができる。

鳥居が見える登山口手前の道の脇に、「鷺やこの道行けば女人堂」と女人堂を詠んだ『谷口雲崖句碑』という立て看板に、女人禁制についても同じ文章が出ている。

女人禁制といえ、女性を穢れものとした封建思想を想像させるが、



弁天祠



女人堂

玄界灘に浮かぶ沖の島の伝えでは、女人禁制は海神の嫉妬を恐れることであるという。穢れどころか女性尊重の思想にもとづくものである。

このことから、三角山が女人禁制だったのには、登山口近くに、海神である市杵島姫命が祭られている弁天祠があることが大きく関係していると思われる。しかし、海神が女性に何の嫉妬を抱くのかは分からない。女人堂からつづく険しい路、九折を登っていくと山頂にたどり着く。

この頂上のすぐ手前の路に、大きな岩が積み重なってあった。これは、無駄安留記本文の「大岩覆ひて、或背き又向て、横に負、豎に抱れ、総て岩石を積たる頂に鎮座する神、峯鐸大権現と崇る」（大岩が覆っている、あるいは背中を向けているように見え、横にもたれ、縦にもたれかかっているように積まれ、そうした岩石の頂に鎮座する神は、峯鐸大権現と崇められている）の描写に一致する箇所である。実際に、大きな岩

が様々な傾きで積み重なっている上に、三角山神社本殿（峯鐸大権現）があった。三角山神社の祭神は、猿田彦神である。猿田彦神は、皇孫降臨の際に先導役を努めたことから、「旅の安全を守る神として航海安全、交通安全などが祈念されるが、今は五穀豊穡の農民の神として各地で祭られている」（中島篤巳『鳥取県百名山』二〇〇二年、葦書房、四九頁）。

この社の創建については不明であるが、「用瀬もてなしの心地域づくり推進会」の

立て看板には、

この社の創建は不明なれども、口伝では因幡の国司「在原行平」この社に参拝し「ゆくさきをみすみのやまを……」と詠んだと云われていることから、西暦800年以前とも考えられる。幾多の災害により消失するも寛永3年（1626）に再建され、宝永3年（1706）の棟札が確認されている。

とある。加えて、『鳥取県歴史の道調査報告書』第一集「智頭往来」（平成元年、三八頁）では、「社殿は弘化二年（一八四五）に再建され、明治四〇年（一九〇七）、昭和四四年（一九六九）に修理されている（『用瀬町誌』）」とある。さらに、『用瀬町教育委員会（平成九年）』の立て看板を見ると、「現在の本殿は弘化二年（一八四五）四月再建のもので、東向であったものを西向にかえて建て、更に明治四十年（一九〇八）に修理したものである」とある。

以上、社の創建に関する記述をまとめると、社が初めて建立された正確な年は不明であり、寛永三年（一六二六）に再建され、さらに、弘化二年（一八四五）に社の向きを変えて二回目の再建、その後二度にわたって修理が施されて現在の社に至る。このことから気づいたことは、現在の社は、無駄安留記作者が見た社とほぼ変わらないと云うことである。なぜなら、無駄安留記（上・下巻）が成立したのは



三角山神社本殿

安政五年（一八五八）であり、最後に再建されたのは弘化二年（一八四五）であるからである。ちなみに、三角山神社本殿は、昭和五年（一九七六）に用瀬町指定文化財となっている。

この社殿の周りの地面を見ると、丸い石がたくさん転がっていた。この丸い石については、『因幡志』に「願ひ成就の人は色々の小石を手向て報賽とする事此里のならばしなり」と記されていることから、この丸い石は、三角山神社が人々の願いを叶えてきた証だと言えるだろう。また、三角山が人々に信仰されてきたことを伝えるものであると言えるだろう。

②三角山頂上からの眺め

三角山頂上からの眺めについて、無駄安留記本文には次のように書かれている。



丸石

脚下は用ノ瀬駅、向は佐治郷、佐治・知頭両大川、九曲の流山谷に響き、峯々は波濤の如く、大江・佐治奥の山田は磴の如く、貌の山・人坂遙に霧こめ、鳥府・加路或は鷺峯、遠望絶景無双の高峯なり。鷺巢の峯は隣れり。佐治・屋住の方より望めば、尖巾の如く三角に峻る。

（訳）

脚下は用瀬駅、向は佐治郷であり、佐治川と千代川の二つの大きな川が曲がりくねって流れ山谷に川の音が響いている（用瀬は佐治川と千代川合流点に形成された谷口集落である）。峯々は大波のようで、大江・佐治奥の山中にある田は石段のようで、貌の山・人坂には霧がたちこめ、鳥府・加路また鷺峯が見え、このような遠望絶景の高峯は二つとない。鷺巢の峯は隣にある。佐治・屋住の方からこの三角山を眺めると、頭巾のように三角に鋭くなっているのが見える。

秋、私は深呼吸をしながら、登山道沿いの木と鎖を使って、一步一步ゆつくりと三角山を登って行った。険しい山道を二時間登って、ようやく頂上に辿り着いた。山頂から周囲を眺めると山々に囲まれ、気圧の関係で山々の一部が雲に隠され、ぼんやりと見える。目の前の風景は絶景無双の水墨画となった。無駄安留記本文には「遠望絶景無双の高峯なり」とある。時間を遡って、昔の人たちも今の私と同じところに立って、同じような風景を眺めたのだろうか。今、三角山頂上に立っている私はまるで一人ではなく、先人たちと一緒に立っているような気がした。昔の人には機械もなく、原始的なツールで石や木材を運び、三角山神社を建てた。神への尊敬とよい生活への憧れの気持ちを感じられる。自分の手、



自らの労働で生活の質を上げることわれわれが学ぶべきだと思った。

ここで、(1)用瀬という地名の由来と、(2)三角山の名前の由来について紹介したい。

(1) 用瀬という地名の由来

『鳥取県史』には用瀬の由来について次のように書かれてある。「用瀬の地名は中世には同村を中心とした地名であったが、同地の松茸尾城主用瀬備前守が天正八年（一五八〇）に没落。のちその子孫が当地に転住して新たに集落を開き、やがて当地が用瀬の名でよばれるようになったと伝える（因幡誌）。元禄一四年（一七〇一）の変地其外相改目録（県立博物館蔵）に、正保国絵図・正保郷帳には用瀬宿と載せたが元禄国絵図・元禄郷帳から用瀬村と改めた」。

(2) 三角山の名前の由来

無駄安留記本文に「佐治・屋住の方より望めば、尖巾の如く三角に峻る。」とあるように、頭巾のように三角に聳えていることから、三角山と呼ぶようになったそうだ。別名、頭巾山（ずきんやま、ときんやま、とつきんざん）とも呼ばれている。『因幡志』には「襟巾山（ときんやま）」と記されており、『因幡民談記』には「三角山」と記されており、『用瀬町誌』には「御栖山^{みすみやま}」と記されている。『用瀬町誌』に「御栖山」の由来について、「猿田彦大神は、皇孫日向高千穂行幸の途中、当山にしばらく栖み玉を以って御栖山と云う」という記載がある。

このように、三角山の名称は様々にあるが、「頭巾のように三角」であるという意味は同じであるようだ。この報告書においては、無駄安留

記本文に記載されている「三角山」に統一して呼ぶことにしている。

③三角山を詠んだ歌

無駄安留記本文には、三角山を詠んだ歌が二首、次のように記されている。

山々のかたをさすりて行雲も

三角の山の腰をなづらむ

社頭に遊宴して

酌みかはす酒のみすみの山の端を

仰げよ下戸のもちのせの人

(訳)

山々の肩をさすって行く雲も、三角の山の腰のところで行き悩むだらう。

社殿の前で宴会して

酒が飲めない用瀬の人よ、酒を酌み交わす我らがいる三角の山の端(山と空の接するところ)を仰ぎ見上げなさい。

一首目は、雲を使って三角山の険しさを詠んでいる。実際に三角山に登って、途中、何度弱音を吐いたことか。しかし、頂上まで登り切って眺めた景色は最高であった。無駄安留記の作者も、空に浮かぶ雲さえも厳しい登山をやり遂げて誇りを持ったことだろう。そのときの作者の気

持ちがよく表現されているのが二首目の歌である。用瀬のすばらしい景色を見下ろし、酒を飲みつつ、意気揚々と歌を詠む作者の姿が目につくようである。

④城跡

城跡とは景石城跡のことである。景石城は三角山の北にあり、正確な築城年月日は不明である。だが、『因幡志』に「太平記三十巻延文の比赤松筑前守入道世貞同律師則祐因作の間處々の城を攻ける時草木操尾景石一支もせずとあれば其以前より國侍居城しけるならん」とあることから、延文年間つまり一三五六〜六〇年に赤松氏が景石城を攻めたことが分かる。このことから、景石城は室町時代には既に存在していたと思われる。

実際に、城山頂上に着いて見ると、しかし、石垣等の城の跡らしきものを見つけることができなかった。

以上、①から④と三角山について報告してきた。三角山の調査を行って、三角山は古くから人々に信仰されてきた山だということを知った。

(三宅 媛子・ソウ ヨウトウ)

仙足ヶ嶽

仙足ヶ嶽は、鳥取市用瀬町金屋にあり、現在は「洗足山」と呼ばれ、三つの登山ルートが整備されている。無駄安留記本文には「同 金屋山中洗足ヶ嶽」と記されていることから、今回の調査でも金屋ルートを通った。なお、以下は「洗足山」と表記する。

まず、洗足山について無駄安留記には次のような記述がある。

同 金屋山中仙足ヶ嶽鬼ヶ巖窟

村より登ること凡三十町、半途までは山路あり。それより荊棘いや生ひに繁りて、樹枝を攀て岩を踏て嶮岨を凌て登れば、大巖畳々として、上を覆ふて老樹鬱々たり。側に倒れし老杉あり。是神代杉とかや。大株なり。即大巖の下に方三四尺の三隅の穴あり。明松を燈して脚より入る。一段下りて這込めば、高三四尺計、幅二間程、中に磊多く、奥の方は少し低くなり、七八畳は敷べし。北窓とて僅に穴ありて、明り見る計。蝙蝠数多、燈に懼れて飛なり。口碑に往古三面鬼棲し由。

これを現代語訳すると、「同 金屋山中仙足ヶ嶽鬼ヶ巖窟 村より登ること約三キロ、途中までは山道がある。それからいばらが生い茂っていて、樹枝をよじ登り、岩を踏みしめて険しい道を乗り越えて登ると、大岩が畳み重なるほどあって、その上を覆って老樹が薄暗く生い茂っている。そばに倒れた老杉がある。これを神代杉とかいうとのこと。大株

である。その大岩の下に一辺が九〇〜一二〇センチの三角の穴がある。松明を灯して脚から入る。一段下りて這って入り込むと、高さは九〇〜一二〇センチばかり、幅は三・六メートル程、中に大きな石が多く、奥の方は少し低くなり、七、八畳敷けるほど広がっているようだ。北窓として僅かに穴があつて、明りが見えるだけである。コウモリが数多、灯りに恐れて飛ぶ。伝説では三面鬼が棲むと伝えられるとのことだ」となる。

今回私たちは、洗足山について無駄安留記本文と絵(図1、図2)に詳細に記されているものに注目して調べた。では、①鬼ヶ巖窟、②神代杉・富士岩、③女夫松の順に報告していく。

①鬼ヶ巖窟

「鬼ヶ巖窟」という名前は、無駄安留記に「口碑に往古三面鬼棲し由」と記されているように、三つの顔を持つ鬼が住んでいる岩の洞窟に由来

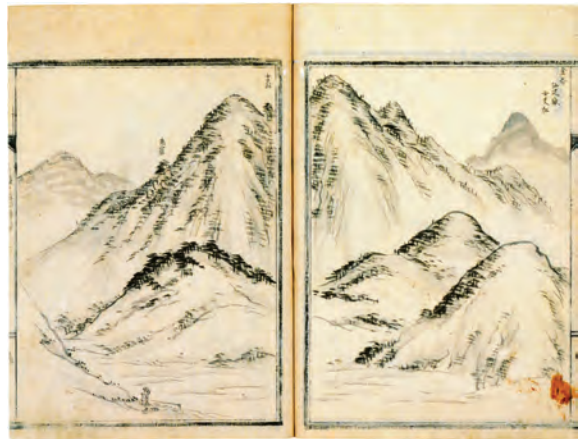


図1

するものであると推測できる。また、『因幡志』にも、鬼とも賊ともいわれる者が住んでいたことに由来する「千賊窟」という巖窟についての記述が存在する。そこで、「鬼ヶ巖窟」と「千賊窟」は同一のもののこととを指すと考えられる。

その形状については、前述の無駄安留記の本文・訳の通りである。一方『因幡志』には、「窟の口廣さ方四尺許り、奥へ二間程入て、下の方へ五尺許り、釣瓶落しに堀下し、其より豎横六七尺奥行七八間」と、より詳細な情報が述べられている。実際の様子（写真1）はというと、入り口は一边が一メートル程の大きさで、本文とも合致していたが、無数の石で塞がれていたため、中に入ることは不可能であった。しかし、岩窟の真上へ登り、隙間から覗き込んでみたところ、かなりの奥行きがあるということは確認できた。

そして歌にはこのように書かれている。

人喰ふ 鬼がいはやのあたりとて

木々のはごとに 血の色ぞする

これを現代語訳すると、「人を食う鬼がいる岩屋の辺りということ、木々の葉ごとに血の色が付いている」となる。「いはや（岩屋）」の「い」には「居」が掛けられ、「はごと」の「は」は「葉」と「齒」の掛詞である。また「血の色」は秋の紅葉のように感じられる。

ここから先は、鬼ヶ巖窟と言われる所以でもある「三面鬼」について詳しく考えてみる。『鳥取県伝説集（上） 因幡編』に三面鬼についての話があるが、次のようなものである。

今から千余年前、洗足山に三面鬼という鬼が住んでいて、近郷の良民

を悩ませていた。その頃八上郡曳田村に住む鳥越長者には、「八上姫」という愛娘がおり、その美しさは太古の八上姫にも劣らなかつた。その姿に一目惚れした三面鬼は、若い美男に化けて毎夜姫のもとに通うようになり、二人は毎夜楽しく過ごしていたが、決して名前や住むところを教えようとしなかつた男を怪しんだ長者の家は、姫の乳母の知恵により、娘に言い聞かせ、こっそり男の服の裾に「うみそ」の糸を縫い付けた。



写真1 鬼ヶ巖窟

夜が明け、男が姿を消した後、乳母がその「うみそ」をたどっていくと、糸は用瀬町の美成の上の岩の間を通り抜け、洗足の岩窟の中に入っていた。こうして相手が洗足山の三面鬼であることが分かると、姫は大変驚き、その時から病にかかってこの世を去ってしまった。それからというものの三面鬼はますます荒れ狂い、付近の良民たちをさんざん苦しめた。しかし、これを聞いた当時の因幡国の国司、在原行平朝臣が、洗足の不動明王に祈願して三面鬼を征伐した。

三面鬼についての記述は『因幡志』にもあり、「三面鬼と云へる鬼神籠り居て國中の人民をなやましけるを、西ノ日天王美女に現し、鬼神を欺き討ち玉ふを云傳へより、委しく神社考に註す」と記されている。「西ノ日天王」とは、鳥取市河原町曳田にある売沼神社に祀られている「八上姫」の別名である。この八上姫は前述した民話の「太古の八上姫」を指す。こちらでは、八上姫が三面鬼を倒したという結末になっている。無駄安留記には「口碑に三面鬼棲し由」とあるが、作者が聞いたという三面鬼の伝説と、ここで挙げた伝説が同じものかどうかは不明である。

② 神代杉・富士岩

神代杉について、無駄安留記本文には「大巖畳々として、上を覆ふて老樹鬱々たり。側に倒れし老松あり。是神代杉とかや。」とあり、絵(図2)に大きく描かれている。実際の写真(写真2)と比べてみると、絵に描かれているのと同じように、二本の大枝が上に向かって伸びているのが分かる。鬼ヶ巖窟の上から下へ伸びており、位置も絵と同じである。したがって無駄安留記に描かれている松と同じものと思われる。

富士岩に関する記述は本文にはなく、絵(図2)の情報しかない。そのため特定することが難しかった。鬼ヶ巖窟と神代杉の位置、人物の大ききとの比較、形などから推測すると、写真(写真3)ではないかと思われる。名前に「富士」と付いているだけあって、岩の上部は尖っており、絵(図2)とほとんど同じであった。また、この神代杉・富士岩に関する記述がある資料は他に見つからなかった。

図2



③ 女夫松

女夫松について、まずは無駄安留記の本文と和歌をみていく。

同 仙足ヶ巖の峯に、女夫松とて古株あり。二樹連枝二枝あり。圍四尺余、一株は少し小くて高数丈、五葉なり。奇株也。俗階子松といひ伝ふる。

千世までもおなじ縁に足引や
手をひく峯の妹とせのまつ

これを現代語訳すると、「洗足ヶ巖の峯に、女夫松という古株がある。二つの樹の二枝が連なっている。樹の周囲は一二〇センチ余り、一株は少し小さくて高さは数丈、五葉松である。奇株である。世間ではこれをはしご松と言ひ伝える」となり、歌は「長い年月が経っても同じ縁が続いているなあ、手をひいているような峯の妻と夫の松は」となる。絵(図1)では洗足山の中央に描かれている。

女夫松(夫婦松)とは、夫婦のように二本並んで生えている松のことで、めでたいものとされる。無駄安留記本文によれば、洗足山の女夫松は二つの木の枝が連なっている奇株であり、その様子を「手をひく」と表現している。作者はその珍しさに感動

写真2 神代杉



写真3 富士岩





写真4 現在の洗足山

し、和歌を添えて記したのではないだろうか。しかし、現在では女夫松は残っておらず、それに関する資料も見つけることが出来なかった。

以上より、女夫松は残念ながら現在その姿を見ることは出来ないが、鬼ヶ巖窟、神代杉、富士岩は、無駄安留記が書かれた当時とほぼ同じ姿で残っていることが分かった。

ここで洗足山の外観について、無駄安留記の絵(図1)と現在の写真(写真4)を比較する。奥にある二つの大きな山が洗足山であるが、その両者で明らかに山の高さが異なっていると分かる。恐らく作者は、洗足山の険しさを表すために、少し誇張して描いたのではないだろうか。また、挿絵では左側の山の斜面に描かれている「鬼ヶ巖窟」も、実際には山の裏側にあるため、写真と同じ角度からは

目にすることができない。つまり作者は、仙足ヶ嶽と鬼ヶ巖窟の両方を一枚の絵に収めるために、あえて配置を変えて描いているということがわかる。

最後に調査を終えての感想を述べる。作者と同じ経験をするべく洗足山への登山を決定したわけであるが、その道のりは非常に険しく、実際のもものよりも誇張して描きなくなった作者の気持ちを察することができたように思う。鬼の岩屋についても、挿絵の全景では頂上よりもかなり低い位置に描かれているが、実際には、頂上と鬼の岩屋を分かつ分岐点を見つけた後、それまでの苦労を無にするが如く下へ下へと五〇〇メートルほど歩いていて、挿絵で見ただけでは決して分からなかったことや、その分、作者が味わった苦労も、まとめて体験できたように感じる。一方、鬼の岩屋や神代杉、富士岩の外見的特徴については、かなりの年月が経っているにもかかわらず無駄安留記の絵や記述そのままに現存していたため、到達するまでの疲労を帳消しにするほど、行く価値のある場所であったように思う。

参考資料

野津龍『鳥取県伝説集(上) 因幡編』山陰放送、一九八九年

(田中 真純・落合 麻衣)

どりなる 鶏ヶ平 不動尊

鶏ヶ平と不動尊についての本文と訳は以下になる。

鶏ヶ平山奥仙足谷不動尊

是樟原鶏ヶ平の村民尊信する霊仏なり。幽谷仙足谷に安堵する。

これを訳すと「鶏ヶ平山奥の仙足谷不動尊は樟原鶏ヶ平の村民が信仰している霊仏である。山奥の仙足谷に鎮座している」となる。

今回は、本文に記載されていた鶏ヶ平と不動尊について報告する。ここでは「鶏」という漢字を「どりい」と読み、後述の「鳥居カ平」は「鶏ヶ平」と同じ場所であると考ええる。

まず、鶏ヶ平についてであるが、鶏ヶ平は、現在の鳥取市用瀬町樟原村に位置している。『因幡志』によると、次のように記されている。

カウノ岨ノ彼方へ鳥居カ平と云フ所、三軒茶屋有テ、馬駕ノ休ミ所トス。此ノ地名郷原ナリ。昔ハ人家モ無リシガ、宝暦年中用瀬ノ土人出茶屋ヲ設ケテ、今ニ至レリ。鳥居ガ平ト云フハ、往古此所ニ宮原村ノ祭神葦男明神ノ花表有シ迹ナルヲ以テ、其ハイウト云リ。其鳥居の踏石鳥居カ平ヨリ二町許リ下、街道ヨリ五、六間西ノ方田土ノ中ニ一ツアリ。又一ツハ街道ヲ小川ニ掛レル堤ノ下ニ有リト云。

これによると、鶏ヶ平という所は、三軒の茶屋があつて、馬や駕の休憩する所となつていた。この地の本当の名は郷原という名前で、昔は人が住む家もなかったが、宝暦年中（一七五一〜六三）に用瀬の村人が茶屋を建てて、今に至つていと記されている。現在では「上方往来お立場跡」と書かれた看板が立っているだけとなつており、『因幡志』に記されている茶屋のような建物は見られなかった。

『用瀬町誌』によると、鶏ヶ平の上方往来はけわしい山道となつており、積雪のある場合は人や馬の通行ができないほどであつたと記されている。現在はある程度の舗装はされており、当時のような険しい山道ではなくなつていた。

鶏ヶ平の名前の由来として、昔、ここに宮原村の祭神である葦尾大明神の鳥居があり、「鳥居」をもじつて鶏ヶ平と呼ばれるようになった。その鳥居の踏石は鶏ヶ平より二町ばかり下で、街道より五、六間ほど西の方の田土の中に一つある。もう一つは、街道沿いの小川に掛かっている橋の下にあると言わ



鶏ヶ平から見た葦男大明神が祀られている山

れていると記されている。また、写真のように雞ヶ平から葦尾大明神が祀られている山を見ることもできた。

『用瀬町誌』によると、雞ヶ平が位置しているのは樟原村で、樟原の発祥はよくわかっていない。だが、現在は田になっている場所が昔は畑で、そこを掘った時に木の鳥居が出てきたという。そこが畑になる前は、荒神社があり、そこに四軒の家があつて樟の太木が生えていたことから、樟原と呼ばれるようになったと記されている。

次に、不動尊についてであるが、無駄安留記によると、不動尊は雞ヶ平の山奥の仙足谷に鎮座されており、樟原の雞ヶ平の住民が信仰していた霊仏であると記されている。現在は不動院とも呼ばれている。現地調査に赴くと、そこには「洗足山 不動院」と書かれたものがあり、狛犬

現在の不動尊



ではなく蛙が置かれていた。なぜ、蛙が置かれていたのか詳細は不明であるが、蛙には人びとを無事に返すという意味があるので、旅人を守護する役割があつたのかもしれない。

『用瀬町誌』によると本尊不動明王は、弘法大師が作つたという話が残されている。それによると、弘法大師が諸国巡礼の途中に用瀬に立ち寄った際、道に迷い、立派で大きな滝に突き当たり、そこを祈りの場所と定め、不動明王を祀つたとされている。これは、弘

法大師が平安時代初期の人物であることから考えて、平安初期に作られたものであると推測される。不動尊についての記述は、『因幡志』や『稻場民談記』など近世の地誌にも記述がなく、さらに『用瀬町誌』以外の近年の文献にも指摘されていない。た。それゆえ、無駄安留記の記述は、当時の人びとの信仰を知る上で重要な史料と言える。

今回調査をするにあたり、無駄安留記本

文の記述が少なく、挿絵などもなかった。そのため、情報が少なく、調査をすすめるのに大変苦労した。このような場所は普段では気付かない場所である。今回の調査を通して、鳥取にもこのような場所があるのだなど感じた。



不動尊に置かれた蛙

(七里 峻史)

あしを 葦尾大明神

葦尾大明神のついて、三つに分けて説明することにする。

一

葦尾大明神という名称で記されている神社は、現在「犬山神社」の名で呼ばれている。

往古は本称を葦原生と書く。神代より此地に鎮座なり。葦原に生ると云古事なる由。老松鬱茂したる社頭平にして、大祠を建て、門に鐘を掲げる。

現代語訳すると、「昔は本称を葦原生^{あしはらを}と書いた。神代からこの地に鎮座している。葦原に生まれたという故事があるためにこの名が付いた。老いた松が鬱々と茂った社頭は平らで大きな祠を建て、門に鐘を掲げている」となる。

葦尾大明神こと犬山神社は、鳥取市用瀬町宮原にある神社である。祭神は国常立尊・大山祇命・保食神・倉稻魂神・素戔鳴尊で、神社の社叢は昭和六〇年（一九八五）に県天然記念物に指定されている。また、古来より足の病に靈験があるとして信仰を集めている。この神社の成り立ちとしては、『因伯のみやしる』という書物によると、八五五年に在原行平が因幡守となって宮原の地に住み、当社を祭祀したと伝承されてい

る。葦尾大明神は近世までこの名で呼ばれ、その近辺九村の氏神として奉られている。一五八一年に社殿その他を焼失した後、一六二六年に再建。そして明治初年に犬山神社と改称した。その後一九一九年に近辺の神社九社を合祀している。右記のように多数の祭神があるのはこのためである。

『因幡志』によると、葦原醜男を略した葦男を社名としたという。葦原醜男とはいわゆる大黒主のことで、犬山神社はこの大黒主を奉つていると『因幡志』は述べている。しかし現在の犬山神社の本殿にある看板には、この葦原醜男を大己貴命と称して、祭神の項目の最後にかつこ付で表記がされている。

『稲葉民談記』では神社の成り立ちについて次のように述べている。

是ハ昔武内ノ大臣当国ヲ治メ給フ時、智頭郡ニスミシアラウミト云（う）鬼神ヲ平ゲ其（う）足ヲ埋メシ所、神ト祝ヒ如此云（う）トイヘリ。



現代語訳すると「これは昔武内大臣がこの国を治めていた時、智頭郡に棲んでいた『アラウミ』という鬼神を倒してその鬼の足を埋めたところであり、その鬼を鬼神として奉ったという」となる。ここで出てくる武内大臣とは武内宿禰のことであると思われる。彼に関する伝説は多く、『古事記』や『日本書紀』にもその名が残されているが、最後は因幡で行方不明になったとする説も存在する。右記の話は彼が鬼を退治して鬼の足を埋めたところからできた神社であるとする内容である。しかしなぜそこから「アシオ」という名前になったのかまでは記述がなかった。鬼の「アシ」を埋めた場所であるから「アシオ」という名になったと推測する。

また『因幡志』の中では『三代実録』に犬山神社が載っている」と書かれている。『日本三代実録』を調べると、元慶三年（八七九）二月八日戊辰の日付に「因幡國正六位上天山神從五位下」という記述がある。

無駄安留記の記述では、神社の本称は「葦原生」だったという。そこから「葦尾」になったようだが、どのような経緯で「葦尾」に変わったのかについては書かれていない。

この神社を誰が建てたのかについては現在も正確には把握されていない。創立時期は定かではないものの、右記のような伝承や書物から、少なくとも平安時代には神社があったと考えられているようだ。無駄安留記の中では神々がいた時代からあると書かれているが、この記述は大きさであるにしても、ずいぶん昔からあるという話が伝承され続いていたということを示している。

二

また、この部分では羽子板という産物の地として宮原を説明している。

是宮原邑は、往古宮人の配流せられて、此に住居せし苗裔なり。産業を不知まゝに、木地挽をおぼえて生を養ふ。今羽子板を作るは其遺業なるよし。殊に古き神社なり。

現代語訳すると「この宮原村は昔、都の宮人が島流しに遭ってここに住み、その子孫たちが作った村である。彼は産業を知らず、この地に来てから木地挽きを習得して生活していた。今この地で羽子板を作るのはその名残であるという」となる。

宮原は鳥取市用瀬町の中にある村で、農業を中心とし、古くから存在するとされる。犬山神社と関係が深く、この神社を中心としてできた村であると『用瀬町史』に記述がある。また、大正一〇年（一九二一）には因幡社駅が完成した。無駄安留記の中では、この宮原にかつて京から島流しに遭った人物が来た場所で、その子孫たちが住んでいる村であると説明されている。

さて、この宮原だが、無駄安留記の中で述べられているように、羽子板の産地として有名であったようだ。無駄安留記が書かれた江戸時代にはこの宮原で作られる羽子板は「こけら羽子板」、「宮原羽子板」などと呼ばれて有名な産物であったとされている。江戸時代に書かれたとされる『因幡志』の中でも、宮原の産物として「羽子板」を挙げており、「コケラ羽子板」と言い、蘇芳やクチナシの煎じ汁で模様を描くのも昔からの遺風と見える」と記されている。

鳥取県の郷土玩具職人であり、鳥取市文化功労賞や鳥取県功労賞受賞者の田中達之助（一九〇一〜七九）はこの羽子板を「八上羽子板」と記している。『郷土と科学』（九巻一号）の中の記載によると、用材は純白を好み、「ノブの木」を最初は用いていたが、後に「イモギ」を使った



田中達之助『鳥取玩具』
(鳥取市歴史博物館所蔵)

という。また、絵の具は「むらさき草」の実を湯で溶かしたものを彩色した、との記述がある。ここではクチナシの名前が出て来ておらず、当時は紫色の方が主流であったのかもしれない。また『因幡志』に記述があるような蘇芳色に染める場合の原料は「蘇芳」という植物であることから、「むらさき草」とは別物であると思われる。この「むらさき草」であるが、ムラサキクサで染色をしたという史実はない。したがってこの「むらさき草」は本物のムラサキクサではなく別のなにかを指しているとも考えられるが、詳細は不明である。

また、この冊子にはこの「八上羽子板」についての起源が詳細に記されている。それによると、「文徳天皇の時代に因幡国金屋千賊谷（今の用瀬町）に多数の強賊がいた。当時この地方の富豪の愛娘を八上姫と言った。強賊の頭目がこの姫に想いを寄せ、遂には姫と通じるようになる。それが乳母に知られた姫は恥じて自害し、頭目の方は自暴自棄になり、ますます猛威を振るった。この頃、天皇から因幡守に任せられ、なおかつこの千賊山討伐の命を受けたのが在原行平であった。しかし強賊はなかなか屈服の色を見せず、とうとう都から勅使が来て行平の従五位と討伐使の位を剥奪してしまった。結果、行平は宮原の犬山神社に居住地を移し、神に祈願し、千体の薬師如来像を刻んでこれを社の下の川に流し、その霊験から行平は強賊を平定させた。千体の仏を刻んだ余材で作ったのが羽子板であり、行平はそれを子どもたちに与えた」という。「八上

羽子板」という名称はおそらくこの話に登場している八上姫からであると推測できるが、八上姫はこの羽子板に直接関係があったというわけではないようだ。田中達之助によればこれが「宮原羽子板の起因創源」であるという。

平成元年に発行された『時空の旅人』という書物では「八上羽子板」の別名が紹介されている。「江戸時代には正月の祝儀として鳥取藩の城主池田公に三枚ずつ献上する慣例があつて「献上羽子板」の名があり」との表記があり、「献上羽子板」との名称も存在していたようである。『因幡志』では羽子板作りの由縁について次のように述べている。

昔王政の時此地の領主宮原の某と云へる公家の貴族時の乱を避て京より来り住めり。其羽子板を製しなりはひとせられがしに終に傳て此里の所作なれりと里の名宮原も某氏を呼来るなりと。

この地の領主であつた宮原の某という公家の人物が京から乱を逃れてきてこの地に住むようになり、羽子板という文化を持ち込んだことが製作の始まりで、この地名もその宮原氏に由来しているというのだ。

『因幡志』を読み進めていくと、宮原氏について「宮原の宿称」という表記があつた。『新撰姓氏録』に表記がある」と『因幡志』に記述があつたので調べると、『新撰姓氏録』の「諸蕃・未定雑姓」の分類の中に「宮原宿称」との表記がされていた。百済系統の人物であり、菅野朝臣という百済系の王族の子孫を先祖に持つとのことであつた。どうやらこの人物が宮原にやってきたという説であるようだ。ちなみにこの『新撰姓氏録』が編纂されたのは弘仁六年（八一五）で、嵯峨天皇の治世であつた平安時代初期である。もしこれが真実ならば、平安時代初期に朝鮮系の

血筋を引く高位の人物がこの地にやってきたということになる。「宮原宿禰」の生没年がわからないため、いつごろの時期に生きていたのかは推測になってしまい、『因幡志』内「京の乱」についても断定ができない。しかし『新撰姓氏録』にはその当時京、あるいは畿内に居住していた人物の名を記録したものであることから、「宮原宿禰」は少なくとも八一五年の時点では、まだこちらに移り住んで来てはいなかったと考えられる。

以上のことから、この地の羽子板作りについては諸説存在することがわかった。そしてこれまで調べてきた中での共通点は外部の人間が関わっていることだ。これは羽子板という風習はもともと京で始まり、そこから全国へ広がって行ったとする、地方への京文化の拡大を示唆している内容であるように思われる。

現在、羽子板は鳥取県立博物館に収蔵されているが、当時のものではなく、後に復元したものであるという。

鳥取県立博物館蔵の羽子板



三

無駄安留記に登場する歌二首を紹介する。

なにはなる短きふしは祈らまじ 米人

長き世まもれあし原の神

羽子板の若紫の色どりは

何れの宮のゆかりなるらむ

ちなみに米人というのは、無駄安留記の著者と言われる米逸処の号である。

まず一つ目の歌であるが、現代語訳すると「短い目先のことは祈らないようにしよう。長い世を守ってくれ、葦原の神よ」となる。一節目の「なにはなる」の「なには」とは今の大阪市付近を指していた地名の「難波」で、かつては葦が生い茂って荒涼としていた地域だったことから、葦にまつわる歌が多く残されている。この葦原の地もかつては葦が茂っていた場所であったと無駄安留記に表記があることから、この「難波」にかけて詠んだ歌であろうと思われる。今までもずっと長くこの世を見守り続けてきた神社に対して、これからもずっと平和な世であるようにお守りくださいとの思いが込められているのだろう。

二つ目の歌の現代語訳は「羽子板の若紫の色はどの宮のゆかりなのだろうか」となる。この歌は紫式部の『源氏物語』にまつわるものとなっている。『源氏物語』の中に登場する「若紫」は「藤壺宮」の「ゆかりの人」である。それならばこの羽子板にある紫はいつたいどの「宮」の「ゆかり」なのか。もちろん羽子板に描かれただけの紫に「ゆかりの人」である「宮」はいないが、作者の教養とユーモアを示した歌であるといえるだろう。

作者が見た宮原の羽子板には紫のような色によって模様が描かれていたと考えられる。『因幡志』の中では「蘇芳やクチナシ」で羽子板に模様を描いていたとある。蘇芳色は媒染の材料の違いによって赤にも紫にもなり、江戸時代には紅花や本紫の代用品として使用されていたということからも、この歌の作者が見た紫とは本物の紫色ではなく、蘇芳で染めた似紫である可能性もある。



犬山神社入口石碑



犬山神社鳥居



犬山神社本殿

最後に無駄安留記内の絵と今回実際に行ってみたの写真から江戸時代と現代の犬山神社の様子を比較してみる。

無駄安留記の絵によると、見開きの右側に集落があり、左側に神社の描写がある。実際に行ってみると、現在のこの辺りは千代川が流れており、因美線が通っていた。千代川について調べると、およそ三〇〇年前には鳥取平野と鳥取砂丘を作った川として現在の千代川の基礎となる川が存在しているようである。そして戦国時代から江戸時代にかけては千代川に堤防が作られたとされ、千代川は比較的古くから存在していたようである。このことから、無駄安留記の作者は千代川を省略して書いたのではないかと思われる。神社の造りとしては、まずは鳥居、そこから小高い山を登って神社の入り口があり、さらに奥に本殿という造りは絵とほぼ変わらなかった。神社の入り口に鐘があると無駄安留記には表記があるが、現在はその鐘が無くなっていることがわかった。よって、江戸期の犬山神社の全体的な風景は今とあまり変わりがなが、部分的には変化が見られるという結論になる。

葦尾大明神こと犬山神社も羽子板の話も、昔からこの地に長く伝承されてきたものである。この地に深く根付き、人々を支えてきた大事な文化だ。伝統、そして守り伝えていくべきものを作者はここに書き記したと考えられる。

参考資料

鳥取県神社誌編纂委員会(編)『因伯のみやしろ——新修鳥取県神社誌』

鳥取県神社庁、二〇一二年。

鳥取県立科学博物館『郷土と科学』九巻一号。鳥取県立科学博物館、

一九六三年。

吉村撫骨『時空の旅人』(私家版)、一九八九年。

『日本歴史地名体系』平凡社、一九九二年。

『定本 和の色事典』視覚デザイン研究所、二〇〇八年。

鳥取県立図書館ホームページ (<http://opac.library.pref.tottori.jp/cgi-bin/Stutskens.sh>)

Stutskens.sh

『新撰姓氏録』氏族一覧データベース ([http://](http://homepage1.nifty.com/k-kitagawa/data/shoji03.html)

homepage1.nifty.com/k-kitagawa/data/shoji03.html)

hml)

『日本三代実録』全巻朝日新聞データベース ([http://](http://www.j-texts.com/chuko/sandai.html)

www.j-texts.com/chuko/sandai.html)

国土交通省中国地方整備局・鳥取河川国土事務局ホー

ムページ (<http://www.gcr.mlit.go.jp/tottori/>)

(山 谷 綾)

屋住不動岩

まず、屋住について説明する。『用瀬町誌』によると、「不動岩のある屋住は、安蔵川をさかのぼり、長登呂の難所を越した谷あいの山麓に、谷に沿って、小畑・夏明・下屋住の部落から成り立っている」とある。屋住村は、もともと家奥村から山越えをし、山間部に仮小屋を建てて山の稼ぎをしていた人々が、徐々にここに定住するようになって形成された。そのため、かつては仮住村といったが、後に屋住村というようになったのである。また、屋住はもと夷住といったのではないかという説がある。『用瀬町誌』には伝承として、「景行天皇の御代、日本武尊が播磨国に來られた際、智頭郡の夷住山に荒海という豪族がいて、朝命に反すること聞き、武牟口命（伊福部系図によると武牟口命は武内宿禰とあり）に征伐を命じた。命は郡家に陣して夷住山を攻めた。荒海は櫓弓八枝を献じて降ったという。この夷住から地名が生まれたとも伝えられている」と記している。

次に、不動岩について説明する。山口より安蔵川の見事な鴈穴のある溪流を右にして登るとやがて長登呂にかかる。その右手の山に不動岩がそそり立っている。昔、弘法大師が美作の国からこの地を訪れた際、その大岩のすばらしさに驚き、不動の像を刻んだと言われている。

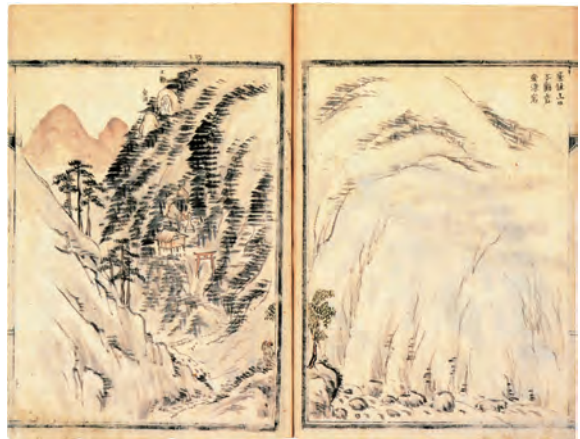
まず、無駄安留記の本文と歌についてみていく。

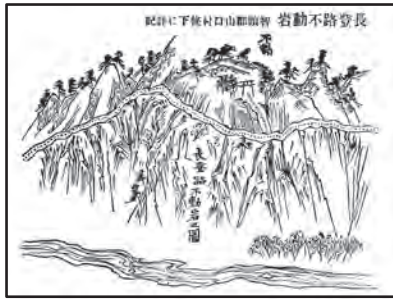
同 屋住谷 不動岩・多聞天岩

是山口村の奥、屋住へ行く谷口の峯上にて、大巖に彫刻せり。外向

に不動尊、相對して毘沙門天を彫せり。山路絶えたる嶮岨なり。何世、誰が作とも不詳。真下に龕堂、神門在。此処より上は礪として、見るも懼しき途なり。

現代語訳は、「これは、山口村の奥の、屋住へ行く谷口の峯の上で、大きな岩に彫刻がしてある。外向きには不動尊、相對して毘沙門天を彫っている。山路の絶えてしまっている険しいところである。いつの世の作かも誰の作かもわからない。真下に龕堂と神門がある。ここより上は礪として、見るのにもおそろしい道である」となる。この記述から、不動岩のある場所は、今は交通上別に問題はないが、昔は難所であったことがわかる。これに関して『因幡志』には「其間長登呂ノ岨道難所ニテ牛馬通ゼズ」とあり、牛や馬が通れないほどの険しいところであった書かれている。確かに、無駄安留記に載せてある屋住山口・不動岩・愛染岩の絵を見ると、不動岩と愛染岩のあるところは更に更に険しいようで人が登れるところではないように見える。





因幡志より

ところが、実際に現地に調査に行つて見たところ、道は整備されて車でも通れるような道となつていた。そして、不動岩と愛染岩に向かう道は無駄安留記の絵と同じように木が生い茂つた険しい様子であつた。絵にある籠堂と神門については、現地に行つて見たところ、絵と同じような配置で建物が残つていた。しかし、籠堂については、現在は物置として使われているようであつた。

最後に歌について述べる。

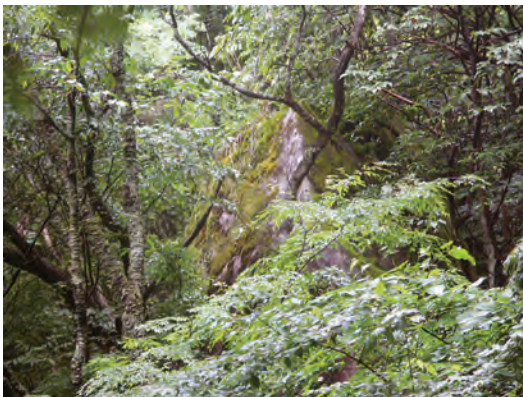
不動岩夕日か、やぐ紅葉ゞは

燃るほのうと見えてとふとし

この現代語訳は「不動岩の近くにある、夕日に輝く紅葉は燃える炎のように見えて尊い」となる。歌では、紅葉が炎のように赤く染まつていると表現されている。なぜ、「炎」という表現がなされているのか、その理由は不動明王に関係すると思われる。不動明王は人間界と仏界を隔てる天界の火生三昧かしょうさんまいと呼ばれる。人間界の煩惱や欲望が天界に波及しないよう烈火で焼き尽くす炎の世界に住んでいる。そしてその背には迦楼羅かるらえん焰えんという迦楼羅の形をした炎を背負っている。この不動明王の背後に描かれている炎を、夕日に染まつた紅葉に見ているのだと考えられる。

参考資料

『用瀬町誌』（一九七三年）
「不動明王」 ウィキペディアより



（岸本 采佳）

藤太良明神禿倉 ほこら

藤太良明神禿倉は現在どこにあるかということが明確には分かっていない。無駄安留記本文にはこのように記述されている。

山口邑の下に小祠を祭る。是往古葦尾の社頭に狸七十五疋出て、夜毎に踊る。此後山の奥、於多喜ヶ平とて礪たる処在て、岩窟数多あるに棲せる者なり。里民藤太良の犬を追懸て、是を囓殺させるよし。

要約すると「山口村のふもとに小さな祠が祭られていた。昔、葦尾神社の社頭で狸七十五匹が毎晩踊っていた。これらは於多喜ヶ平という険しい山の岩窟が多くあるところに住んでいた。里の人々が藤太良という犬を狸の住む穴に入らせて狸を退治させた」ということになる。山口村は現在の鳥取市用瀬町安蔵で、『因幡志』によると高九二石余、竈数三〇余であったという。

様々な文献を調べてみるとこれに似たような説話が合わせて九つみつかった。しかし話の大筋は同じなのだが詳細は異なる点が多かった。

- 1 藤太郎坊① 『用瀬町総合支所だより』（九六号、二〇二二年一〇月）
- 2 藤太郎坊②
- 3 藤太郎坊③
- 4 藤太郎坊④

- 5 用ヶ瀬藤太郎明神の事 『因幡怪談集』（二〇〇三年）
- 6 藤太郎坊犬（二） 『鳥取県伝説集（上） 因幡編』（一九八九年）
- 7 藤太郎坊犬（二）
- 8 佐治の谷のトーダラ坊 『佐治村誌』（一九八三年）
- 9 社のタヌキの話 『因伯昔ばなし——因伯の落人伝説、続・用瀬町の昔話』（一九七五年）

これらの説話は大きく分けて次のA・Bの二種類に分類することができる。

A ある日、大勢の子どもが集まって「藤太良さえいなければ面白い」と言って踊っていた。この子供たちは実は狸で藤太良という犬に退治させることにした。しかし数十匹の狸を退治したあと藤太良は息絶えてしまった。その後その地域には狸がいなくなり、社をたてて藤太郎を祀った。社の隣に植えた柿は藤太良柿と呼ばれ親しまれた。

右の2・3・5・7の説話がこの系統の説話であり、狸が子どもに化けている点、狸の数が数十匹と曖昧である点、人々を救った藤太郎の墓には柿がなり、人々に親しまれるという点で共通している。

B 昔、赤牛を飼っている老夫婦がいた。ある日逃げ出した赤牛を追っていた老婆が赤牛に殺される。その赤牛は実は「お滝がなる」に住

む狸であった。老人は「葦男大明神」のお告げで藤太良という犬を借りて七十五匹の狸を退治させる。しかし最後の一匹で藤太良は力尽きてしまった。老人は家の裏に「犬の宮」をたてて祀る。この「犬の宮」は後に葦男大明神に合祀され、後に「葦男大明神」は藤太良にちなんで「犬山神社」と改称した。しかし最後の一匹の狸が身籠っていたため、この地域の狸がいなくなることはなかった。

1・4・6・8・9の説話がこの系統の説話であり、狸が牛に化けているという点、その牛に女性が殺されてしまうという点、狸の数が七十五匹である点、人々を救った犬が犬山神社（葦尾神社）に祀られるという点で共通している。

無駄安留記に記載されている説話は、この二種類の説話のうちBのものに近く、おそらく無駄安留記の作者が聞き記したのはBの系統の伝説であったのだと思われる。しかし、無駄安留記の説話は他のどの説話とも違い狸を退治する明確なきつかけや理由がなく、藤太良が死んでしまう描写がないという特徴がある。また、この二種類の説話は話の詳細は異なるものの、「犬が人々を困らせている狸を退治し、力尽きる。」という大筋が共通しているため、もともと一つのものであったが、口伝などで伝わるうちに二つに分かれていったものであると考えられる。

ところで、静岡県磐田市や長野県駒ヶ根市にも「早太郎（疾風太郎）」という犬が人々の暮らしを脅かす猿神を退治し、自らも力尽き、墓が立てられ、その供養のために大般若経が奉納されるという伝説が残っている。早太郎伝説は現在でも人々に親しまれ、絵本や早太郎にちなんだ温泉などが作られている。これに対して藤太良伝説は、いくつかの文献に

説話が残っているだけの状態になっている。ここから、一つの説話を語り継いでいくことは容易なことではないということが分かる。また、こうした犬が自らは倒れながらも人助けをするという伝説は他にも残っており、昔から人と犬は密接な関係にあったということが良くわかる。

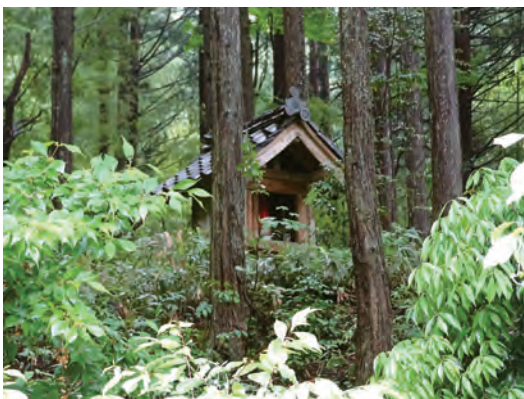
無駄安留記本文の最後には歌が書かれている。

狸等が八畳敷をかぶせたら

こまるだろうかとうた良の宮

訳すと「狸たちが八畳敷をかぶせたら藤太良は困ってしまうだろうかどうか」となる。「八畳敷」というのは狸のふぐりのことで、狸のふぐりは八畳まで広がる言われることからこう表現されている。「こまるだろうかとうた良の宮」の「とうた良」の部分は「藤太良」と「どうだろう」にかかっており、「藤太良は困ってしまうだろうかどうか」という訳になる。

今回、山口村や犬山神社で調査を行い、犬山神社のふもとに下の写真のような小さな祠を見つけたことができた。地元の事に詳しい



徳永先生によると、この祠が藤太良明神禿倉ではないか、ということだったが、明確ではないようである。

藤太良明神禿倉は無駄安留記本文に絵がなく、小さな祠が祭られていたこと以外は場所についての言及もないという、無駄安留記の中でも少し特殊な部類の記述であったと感じた。しかし、著者がこの祠について無駄安留記に記していることから、当時は人々の信仰を集めていたのかもしれないことが想像できる。そうした当時の名所が今では場所も明確でないというのだから、信仰を維持し、保存することが困難であるということがかがえる。今回、文献を用いて調査をするにあたり、一つの民話が伝播するにつれて少しずつ形を変え、異なる内容の話として現在まで伝わっているということを目にして、非常に興味深く感じた。

(坂本 宗生)

熊野権現

無駄安留記本文にはこのように書かれている。

同 佐治郷大井邑熊野権現

村より三四丁奥の方なり。社頭の前、神門の左右、数多石の蓋

石傍立をして、一区に一躰宛の石仏を安ず。奥の院とて

数ヶ所、彼石の圍の石仏を安堵す。或は四躰仏とて、岩の

前に石仏を安ず。其形、面の不具なるあり。又は首を頒けし

仏躰もあり。何れの由なるにや。右の方の奥大岩の前なる

を奥院と云。左の峯にも、大岩上に宝経塔あり。社頭にも

宝経塔三区あり。亦社頭に大岩碑在。正面の上に梵字

彫たり。是因幡志の図するものならん。

これを現代語訳すると、以下のようになる。

同、佐治郷大井村熊野権現

村から三四丁奥の方である。社殿の前と神門の右と左に、数多くの蓋

石が並んで立っており、一区切りの場所に一体の石仏が安置されている。

奥の院といって数ヶ所、同じように石でできた囲いの中に石仏が安置さ

れている。他にも四人仏といって岩の前に石仏が安置されている。その

形は、顔の不具なものがある。また首がなくなっている石仏もある。ど

ういう理由であるだろうか。右の方の奥で、大石の前のあたりを奥の院

という。左の峯の大岩の上に宝経塔がある。社殿の前にも宝経塔が三つある。また、社殿の前に大きな石碑がある。正面の上に一部梵字が彫つてある。これは因幡志の図にあるものであるだろう。

熊野権現は、鳥取市佐治町大井にある旧熊野神社を中心に、周辺の数多くの石仏、石塔を合わせたものとして無駄安留記の中に記されている。熊野神社は和歌山県の熊野三山信仰の神社である。遺跡は古墳時代に墳墓が造られたことに始まるとされており、石仏が安置されたのは江戸時代に入ってからである。この頃から参拝者が増加し、無病息災や学問、安産などに効き目のある場所とされていた。大変賑わった場所であったものの、大正五年（一九一六）に口佐治神社に合祀されたことにより廃絶してしまった。現在は熊野神社遺跡と呼ばれており、鳥取市指定の文化財に登録されている。

「権現」とは日本の神々が実は仏教の仏の化身であるという本地垂迹説に基づく神号、つまり尊称であり、熊野権現は熊野三山に祀られる神をそれに基づいてそう呼んでいるものである（ウィキペディアより）。今回熊野権現を指すときは、現在の呼び名である「熊野神社遺跡」とする。無駄安留記本文について説明していく。本文の中で、四人仏について「四人仏といって岩の前に石仏が安置されている。その形は、顔の不具なものがある。また首がなくなっている石仏もある」と記されている。四人仏は遺跡の中の場所の一つである奥の院と呼ばれる所にある。奥の

院は本殿跡へ続く道とは別の道を進んだところにある。無駄安留記の中の熊野権現の絵には入り口から社殿を描いたもの（図1）と、奥の院を描いたもの（図2）がある。この奥の院で著者とみられる男性ともう一人二人の人物の姿が描かれているが、その二人が四人仏の置かれた場所に向かつてよじ登っているような様子が見られるのである。現在の四人仏までの高さは約二メートル強ほどで、よじ登るほどの高さは無い。また写真1を見ると現在それが置かれている崖は三段の階段のようになっている、石仏は一段目にある。無駄安留記が書かれた当時、四人仏は現在よりももう一段上の場所に置かれていたかもしれない、ということが考えられる。石仏が置かれている奥行きについて現在の様子で無駄安留記の絵を見比べてみると、わずかではあるが現在の方が奥まった位置であった。更に、石仏の周りには二、三〇センチほどの石が沢山あり、私たちが立っていた地面の一部にも同じような石が転がっていた。崩落の跡のような様子であったのだ。また、絵の中の崖は二段であるが、先に述べたように現在は三段であった。無駄安留記やその他の文献には、そのような記述は見られなかったため真実は不明だが、何かの原因で損壊してしまい、危険を考慮して現在の場所に置き直した可能性は無いとは言えないようだ。

また、奥の院の道を三、四〇〇メートルほど登ったところに、図2にある大岩の上に乗せられた宝経塔がある。本文の中にも「左の峯の大岩の上に宝経塔がある」と書かれている。これも四人仏と同じ奥の院に位置している。現在では残っているものの、写真2のように宝経塔の下の部分が潰れており、上の長い部分だけが目立っている。絵は上の方は尖っているのだが、現在は丸くなっていた。

無駄安留記本文には記述はなかったのだが、実際に行ってみると多く



図2



図1



写真2 宝経塔



図3 因幡志より

の五輪塔があった。鳥取市公式ウェブサイトの「熊野神社遺跡」に掲げられている「熊野神社遺跡案内地図」にも、遺跡の入口を入ったすぐのところに五輪塔が描かれている。

当時熊野神社の本殿があった場所については、「社殿周辺に大きな石碑がある。その正面の上側に梵字が彫ってある。これは因幡志の図にあるものであるだろう。」と記されている。『因幡志』にはこの石碑の絵が描かれており(図3)、「高サ八尺五寸厚サ二尺三寸」と書かれている。これを現代の単位に直すとその高さは約二五五センチ、厚さは約七〇センチもあったことがわかる。しかし現在のこの石碑の高さは、約一三〇センチほどであり人の背丈よりも低く、「大石碑」と言うほどでもない。また、『因幡志』の絵の中の石碑には梵字が二つ彫られているが、現在のそれには一つしか確認できなかった。無駄安留記や因幡志が書かれた後に崩れてしまったのかもしれない。また、図1の絵には社頭に祠が描かれている。図3ではこれが熊野権現であると書かれているが、現在は写真3のように何かが立っていた跡が残っているばかりで、祠のようなものはなかった。また、無駄安留記本文には無いが、『因幡志』によると社殿周辺のはずれたところに神蔵という石でできた祠があるという。今回それを確認することはできなかったが、鳥取市公式ウェブサイトによれば現在も残っているようだ。

今回、四人仏が当時のままかどうかという疑問が残ったが、場所などは無駄安留記が書かれた当時のままであり、江戸時代の地形が現在でも残っているということがわかった。石仏や石塔などは形が変わっているものもあったが、貴重な熊野神社遺跡を後世に残し、伝えていかなければならないと思う。

(槇野 花)



写真1 四人仏



写真3 本殿跡?

切明大明神 佐治四郎

無駄安留記本文では、切明大明神と佐治四郎について、次のように書かれている。

即佐治四郎尾張長経の古墳、切明大明神なり。山中所々の石仏は、代々の古墳ならん。又神門の右の方、荊棘の中に五輪両三在。此側に牧童牛を繫ば崇りある、草を刈者あれば、忽ち病をうくるよし。

この部分を現代語訳すると、以下の通りである。「佐治四郎尾張長経の古墳は、切明大明神である。山の中の所々にある石仏は代々の古墳であるようだ。また、神門の右の方の荊棘の中に五輪の塔が二つ、三つある。このそばに牛飼いの子どもが牛を繫げば崇りがあり、草を刈る者がいれば、すぐに病気になるようになったようである」。

この記述は、「佐治郷大井邑熊野権現」という項目のなかにある。しかし、熊野権現は大井村にあり、切明大明神は刈地村にあるので、この二つは別のものであると考えた。それゆえ、ここでは、切明大明神と佐治四郎について調査したことを報告していくことにする。

まず、切明大明神についての報告をする。無駄安留記の本文に書かれている切明大明神はどのようなものであるのかということを明らかにするために、無駄安留記より六〇年余り前に書かれた『因幡志』を参考にする。『因幡志』には次のように書かれていた。「元祖四郎の墓なりとて

村の入口森の中に一丘あり。方三間許石垣高四尺餘、其上宝経印塔を安ず。高四尺七寸。其外小五輪碑数多あり。祀て切明大明神と言う」。無駄安留記と『因幡志』の記述より、切明大明神とは、佐治四郎の古墳を指すものであることが明らかである。また、この『因幡志』の記述と無駄安留記の記述が類似していることから、無駄安留記の作者は、『因幡志』のこの部分の記述を参考にしたであろうと考えられる。

次に、佐治四郎についての報告をする。『因幡志』を見てみると、「本姓尾張氏、近県加勢木村の百姓佐治氏代々地頭職の讓狀を所持せる」という部分と、「四郎此郷に入るのを始め先づ刈地を開き、次に加勢木村をひらきて、其より次第に奥は栃本の里に至る」という部分より、佐治四郎はこれらの土地の開拓者であったと考えられる。さらに、『八頭郡誌』には、以下のような記述があった。「四郎卒するに及びて村民小祠を建て切明大明神と号す。切明とは佐治氏此の溪を創開せるを以て名づくるなり」。また、『稲葉民談記』には、「太平記南合戦二因幡士ノ内佐治但馬守ト言フ者アリ、定メテ此ノ一家ノ内成ルベシ。昔ヨリ佐治一郷ノ主ト見エタリ」。これらの記述から分かることは、佐治四郎の死後に、村民が佐治四郎の功績を称え、切明大明神として佐治四郎を祀っていたということと、佐治氏が刈地村を領していたのが鎌倉時代から戦国時代の末期の間であると考えられるということである。

ここで、さらに二枚の写真を用い、無駄安留記の作者が佐治四郎に

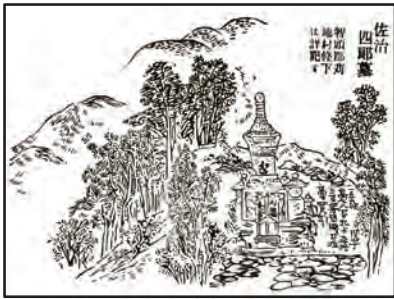


図1 因幡志より



写真1



写真2

ついでどのように情報を得ていたか考えていくことにする。写真1が、因幡志に描かれているものと同じ墓で、写真2が、現在の佐治四郎の墓である。因幡志に描かれている墓(図1)と、現在のものが同じ場所にあるものであるかは定かではない。しかし、絵と写真を見比べてみると、石塔の数に違いはあるが、中央の墓標はどちらも宝経印塔である。このことより、無駄安留記の作者は、『因幡志』を参考にしていただのではないかと考えられる。さらに、無駄安留記について触れると、無駄安留記で描かれている絵の題は、「佐治郷大井村切明明神」となっているが、実際は「熊野権現」について書かれた絵である。このことより、無駄安留記の作者は勘違いをしてしまったのではないかと考える。

続いて、現在、切明大明神が祀られている刈地神社についての報告を、現地調査で得たことも含め報告する。現在、刈地神社は、鳥取市佐治町刈地にある。『因伯のみやしる』によると、刈地神社では、切明大明神と群佐羅大明神という二柱の神が祀られているようである。群佐羅大明神は、刈地神社にもともと存在した氏神である。また、切明大明神は『八頭郡誌』に、以下のような記述がある。

刈地の東方字鳥居原に方三十間高七八間の一丘ありて、樹木鬱蒼たり。丘上に方三間高四尺の一段を設け石垣を築き上に、一基の経塔を安んず。高四尺七寸碑石覆うに苔を以てし刻字消亡す。伝え云う

往昔本郷の領主佐治氏の先を四郎と称し、創め本郷二十二村を闢き
当村に住めり。其霊を此に祭ると。後生之を尊崇して切明神と称す。
明治四年三月本村に改め同五年三月摂社に列せらる。

ここから、刈地神社の当時の様子や刈地神社に二体の氏神が存在する
理由が昭和五年に合祀されたことによるものであることがわかる。

現地調査では、静寂な雰囲気を感じた。人が行くには少し大変なところ
にあったためである。しかし、神社からは、その土地の開拓者を祀っ
ているという威厳を感じることができた。

最後に、無駄安留記には、次のような歌が書かれていた。

切明けし神の宮居も夏きては

若葉しげりて闇となりけり

訳すと、「切明大明神の宮居のところにも夏が来ると若葉が茂って闇
となってしまった」となる。「切明けし」は掛詞になっていて、「切明大
明神」と「佐治四郎が土地を開拓したこと」の二つを表している。

今回の調査で、無駄安留記に出てくる切明大明神がどのようなもので
あるのかということ、切明大明神と佐治四郎の関係を明らかにするこ
とができた。特に、佐治四郎については、様々な書物に名前が記載され
ていることから、有力な人物であったことは明らかである。このように、
一つの地点の調査でも、様々な伝説や人物について触れることができる
のが、無駄安留記の特徴であり、面白さ・魅力であるのだと感じた。

(佐治 晃一)

加瀬木薬師堂

加瀬木薬師堂とは、現在の鳥取市佐治町加瀬木にある笹尾神社の薬師堂である。別名を藤森山福善寺といい、現在因幡薬師霊場二十三番札所に指定されている。また、この薬師堂はその本尊薬師如来像とともに鳥取市の保護文化財に指定されている。

笹尾神社は佐治町加瀬木にある村社である。村社とは、近代社格制度の一つで、郷社の下、無格社の上に位置する社のことである。笹尾神社の創立は明らかになっていないが、古来より牛頭天王をその社の名としていた。牛頭天皇とは、日本の神仏習合における神で、疫病・農作物の害虫・邪気などを流し去る疫病信仰に御利益があるとされ、また薬師如来の化身とも言われている。以前は笹尾山に鎮座していたが、のちに現在の地に奉遷された。また、牛頭天王の名を改め現在の笹尾神社へと改称したのは明治元（一八六八）年八月である（『佐治村誌』による）。

加瀬木薬師堂は笹尾神社の鳥居と本殿の中腹に位置している。神社と薬師堂が同じ敷地内にあることは一見変わっているようにも思われるが、神仏習合において牛頭天王と薬師如来は一心同体であるから、笹尾神社と加瀬木薬師堂の位置関係はそれほど不思議ではない。

では、無駄安留記本文における加瀬木薬師堂の記述について、以下で述べることにする。加瀬木薬師堂については、次のような記述がある。

本尊薬師如来は、行基菩薩の作仏にして、霊像なり。

藤森山福善寺と号す。元此山号寺号ともに村名なりしが、

高麗洪水の時、大木流れ来りて、溪水に横はりて、水浜りて民家に溢れ、困窮する。是より村号を加瀬木と改革す。薬師の霊験はかぞえがたし。又左の高所に牛頭天王の社美麗を尽せり。

御仏の瑠璃の光のなかりせば

人の病をいかがはらさむ

最初に、本尊の薬師如来像は、行基菩薩の作で、霊像であるということが書かれている。しかし専門家によると、室町時代に地方で刻まれたものではないかと言われている。また他に、加瀬木と松上神社との密接な関係から見ても、安和の変で謀反の罪によって都落ちした村上天皇の第三子致平親王の作ではないかという説もある（『漆の里の昔語り——上加瀬木集落のあゆみ』）。松上神社との関係についてはこの後で述べているので、そちらを参考にしていきたい。

ここで行基菩薩について少し紹介をしておく。行基（天智天皇七（六六八）年～天平十二（七四九）年）とは、日本の奈良時代の高僧である。民間への布教活動を禁じられた時代に、その禁を破り畿内を中心に広く仏法を解き篤く崇敬された。道場や寺院を多く建立し、溜池や堀などの制作にも携わり、多くの社会事業にも従事した僧侶である。その功績を認められ、聖武天皇の治世に東大寺の大仏建立の実質上の責任者に任じ

られた。また、行基の伝説は日本全国に数多く存在している。

無駄安留記本文は、このあと加瀬木の名称に話を移している。無断安留記には、高麗洪水のときに大木が流れて来て谷川に横たわったため、せき止められた水が民家に流れ込んで困窮した、とある。この出来事をうけて、本文では「是より村号を加瀬木と改革すル」としていることから、もともとあった「かせぎ」という名に、「加瀬木」という漢字を当てはめたのではないかと私は推測している。また高麗洪水とは、文禄二（一五九三）年に起こった洪水のことである。鳥取の多くの地方が被害を被り、宇倍神社の境内にまで水があふれたと言われている。

しかし、佐治村誌には、これとは全く違う由来が書かれている。この由来には、鳥取市内にある松上神社との関わりが大きく関連している。

江波から加瀬木に越す峠に、「堂ヶ平」という所があり、そこに昔三軒の家があった。その三軒の内、二戸は江波に、一戸は加瀬木に越したのだが、彼らが鳥取市松上の松上神社の鍵を持っており、この三戸が一年ごとに受け渡しをしていた。よって松上神社の祭礼は、江波と加瀬木の人が行かねば始まらなかったのである。この鍵のことについて佐治村誌には次のような記述がある。

今から千年程前に、京都の比叡山で修業した僧が松上にやって来て、松上のふもとの松の木に鏡をかけて寝た。朝になって朝日がこの鏡にさして鏡が光った。僧は急に靈感を受けて、ここに社を作って、この鏡を収めた。そして、松と鏡になぞらえて松鏡神社と名づけた。これが今の松上神社となった。僧は松上を立ち去って、「堂ヶ平」までやって来てこの家に泊った。そして「ここに鍵がある。この鍵は松上に今お宮を作ったが、その扉の鍵である。この鍵

を預かってくれないか。」と言いついて、堂ヶ平をどこにもなく出て行った。

鍵を預かった三軒の家の人達は話し合いの結果、一年毎に鍵を預かることにした。

ところが、このうち一戸が佐治に「かせぎ」に家を引っ越した。これから「加瀬木」の名が生れたという。（『佐治村誌』一〇二九（三〇頁）。

この記述における「かせぎ」が何なのかは定かではないが、文脈から推測すると恐らく「稼ぎ」であると思われる。加瀬木は古くから製紙業がさかんであったため、出稼ぎに行ったとも考えられる。また『漆の里の昔語り——上加瀬木集落の歩み』には、昔、現在の加瀬木の地に「カセ」の木があったことや、文永三（一二六六）年四月三〇日「沙弥正仁相傳伏」に見られる「かせぎ」のことなどいくつかの説がある。

ここで、「今から千年程前」がいつに当たるのかについて考える。『佐治村誌』の出版が一九八三年であることから、そこから千年前は九八三年である。『因伯のみやしる』の中に、「貞元元年（九七六）に野坂村千間之助国重長者が講を催し、比叡山の座主を招聘したところ」（四四頁）





笹尾神社鳥居

とある。これは、九八三年から七年の差しかなく、比叡山から僧がやって来ているという話にも合致する。加えて、一九八一年に編纂された『因幡誌』にも加瀬木の記述がある。このことから、『佐治村誌』の記す伝承はかなり信憑性の高いものであると言える。

次に、「薬師の霊験はかぞえがたし」についてである。ここで、薬師如来についての紹介をする。薬師如来とは、大乘仏教の仏で、東方の淨瑠璃世界の主のことをいう。除病安業、息災離苦など十二の誓願をおこし、生あるすべてのものを救うと言われている。ふつう左手に薬壺を持ち、右手は施無畏印をむすぶ。脇侍に日光・月光菩薩、そして、十二神将にまもられる。日本では天武天皇九（六八〇）年ごろから薬師信仰がさかんになった。奈良薬師寺、京都神護寺の像などが有名である。薬師瑠璃光如来の略で、別名を医王仏ともいう。加瀬木薬師堂の薬師如来にも、脇仏として日光・月光菩薩があり、その他不動明王像・毘沙門天像が安置されている。

この薬師の霊験に関して、前述の鳥取市内にある松上神社の祭礼「松上参り」の存在が考えられる。松上と加瀬木の間にこの祭礼の信仰が一度破られた際、城下が大火事になった、という話が残っている。

松上参りについては、元々、旧社村江波との境界、堂ヶ平にあった仏像を安政六（一八五九）年に加瀬木へと移転したものの、その際本尊薬師如来像は加瀬木に、観音と阿弥陀仏は江波に分けて祀ったとされる。このことから、前述の加瀬木の由来に

ついでの部分でも触れたように、松上とは強い繋がりがあったと推測される。

次に「又左の高所に牛頭天王の社美麗を尽せり」についてである。笹尾神社は冒頭で触れた通り、牛頭天王を称している。それから「牛頭天王の社」＝笹尾神社と判断ができる。「左の高所」という記述があるが、薬師堂を正面に見据えると、笹尾神社は右手に見える。無駄安留記の中で描かれていた笹尾神社の全体図でも、その位置は現在と変わっていない。そう考えると、「左の」は鳥居のあたりに視点を置いた記述ではなく、筆者が鳥居をくぐって最初に薬師堂に入り、そこから出る際に笹尾神社について記述したものと考えられる（なお、時代から考えて、ここで筆者がくぐった鳥居は、前述の明治二年に立てられた大鳥居ではないと思われる）。

加えて加瀬木薬師堂の建物について言及すると、現在の薬師堂は明治三五年に改築されたものである。そこから更に、昭和五十年に本来の茅葺屋根がその老朽化によりトタンによる被覆をなされてしまい、その優美な姿が見られなくなってしまった。鐘つき堂があり（これは、実際に現地を訪



加瀬木薬師堂（藤森山福善寺）



笹尾神社

れた際に見られた）、以前は梵鐘があつたが、昭和十九年に国策に沿つて供出した。

最後に歌についてである。加瀬木薬師堂の歌は、次の通りである。

御仏の瑠璃の光のなかりせば

人の病をいかゞはらさむ

現代語訳は、「仏様の瑠璃の光がなかったとしたならば、人々の病気をどうやって治すのか、いや、治さない。」となる。この歌は、筆者が「靈験かぞえがたし」と述べたと同様に、加瀬木薬師堂の薬師如来像の御利益について歌ったものと考えられる。薬師如来は医と薬を司り、人々の疫病を治す仏とされている。また冒頭にも述べた通り、牛頭天王の化身とも言われており、その牛頭天王も疫病を除く神である。いずれも病気から信者を守護する神仏であることから、靈験も強かったことが窺える。薬師如来は東方浄瑠璃世界の教主なので、薬師瑠璃光如来と呼ぶ。「光」とは、仏の力を尊敬して言うものである。したがって、仏身が瑠璃色という意味でも、瑠璃色の光を放っていると言う意味でもないが、「瑠璃光如来」という呼び名から、薬師仏は瑠璃色の光を放っており、その光によって病が治ると信じられていたのではないかと、この歌によって思われる。

(三田 友可里)

笹ヶ棧道・赤松棧道

はじめに無駄安留記における笹ヶ棧道と赤松棧道の記述について分析する。棧道とは木材や縄などを用いて棚のように張り出した道のことである。無駄安留記には「同 笹ヶ棧道 数百歩の間、棧道を作る。山の方に礪々たる所は各杣を構えて防ぎたり。また赤松棧道とて数十歩の所もあり。共に上方道なり」とある。これを現代語訳に直すと「笹ヶ棧道は長さが数百歩ほどの棧道である。山に沿って岩がごつごつしているところは杣を打って防いでいる。また赤松棧道といって数十歩ほどの長さの所もある。両方とも大阪方面の道である」となる。

この二つの棧道は智頭往来の一部分の道を指している。智頭往来とは無駄安留記が書かれた江戸時代には、参勤交代の道として重要視されていた道のことである。智頭往来はまた上方往来、因幡往来とも呼ばれていた。かつては殿様も商人も旅人も荷駄も通った主要道であった。『鳥取県謎解き散歩』（日置桑左エ門、新人物往来社、二〇一三年）によれば、江戸時代以前にも八〇八年頃に官道としてすでに使われていたようだ。

① 笹ヶ棧道

まず、笹ヶ棧道についての調査結果を報告する。『智頭町誌』によれば、笹ヶ棧道のあたりは古くは栃カ畑といい、智頭町上構（現在の智頭町市瀬）の入り口として二、三軒の茶屋があった。なかでも屋号荒川屋は旅籠で継村送りの役を担っていたという。継村送りとは領主から発せ



られる触書や廻状、町や村の相互間での連絡を村から村へ順次伝える際に、前の村から来た連絡を次の村へと伝える働きを持つ役職である（『国史大辞典』）。笹ヶ棧道の北側の上り口から御建山の中腹を巡って道が一キロほど続く。今に残る北側の上り口にある二つの地蔵は、一つに「宝暦五亥十一月」「願主市瀬兵衛」とある。宝暦五年は一七五五年にあたる。また、二〇〇年前に書かれた『因幡志』（寛政七年（一七九五））には、「地理誌に宝暦年中ホキ道改造ありて」とある。このことからササガホキの山崩れを改修した祈り、もしくは不運にも事故に遭遇した往来人の安全を祈念して、地蔵を祭ったのかもしれない。寛延元年（一七四八）十月一日に「さがが峰岐の山が崩れ落ち、往来の人が庄死する」と『県史』に記載があり、この出来事があったので、道が改造されたのではと推測される。ササガホキの山崩れや雪ずりは再々のことであり、鳥取藩では先に寛文二年（一六六二）正月に「智頭郡篠ほき雪づりの時、にわかに大損」といい、普請奉行には「油断なきよう堅く申し渡」と言っていたと『藩史・五』に書かれている。ササガホキを通るときは油断しないように呼びかけていたほど、困難な道であったことがうかがえる。

この街道が難所であったことを物語る資料はいくつもある。『因幡志』には「大雪には牛馬通らず」とある。享保六年（一七二二）に書かれた『因府上京海道記』には、この道は「甚キ難処東海道処々ノ難所トイエトモ、カ、ル危難ノ処ナシ。殊更、雪中ニ通イナシ。又此ホキ、馬二頭ナラブ事ナリガタシ。ホキ中ニテ少ツ、馬ヲ引入ル処アリテ、タガイニ馬子トモ声ヲカケ待合通ル也。若行チガフ時ハ、一方ハ必谷ニ落ベシ」と、とても危険な山道であったが、行き交う人々は苦難をものともせず越えていたという記述があると『智頭町誌』にある。また、因幡国守平時範が日記『時範記』（承徳三年（二〇九九））に、この峠を通り因幡の国府へ

と赴任したことを書いている。「山路は非常に険しく、つづら折りの道を行くようである」と記していて、ササガホキを通ったようである。「ササガホキ」の由来については『因府録』を編纂した佐藤長健が「智頭郡の用ヶ瀬より智頭の駅まで二里ばかりの間、笹の多く茂りたるを笹が峯岐という」と記している。長健は藩主の御側役として三〇〇石の役料を賜った人物で、明和六年（一七六七）に没したが、それ以前で「篠カホキ」と記すものもあり、どの字をあてたものか定かではない。いずれにしても『智頭町誌』によれば、明治二五年の字全図では「篠ヶ川」とされた。ちなみに、字図と一八七三年の地租改正法公布後に、一筆ごとに地番を付しその境界と地目を確定する地押調査の見取図を、小字単位で集めた地籍図の一種である（『最新地理学用語辞典』浮田典良（編）、大明堂、二〇〇三年）。どの文献にも笹ヶ棧道がどれほど危険であったかが記されており、当時の人は馬などを引き連れて、困難な道のりを歩いていたことが分かった。

無駄安留記の絵の右上には、「笹ヶ棧道、老椿鬱蒼として高く、脚下の溪流を隠す」



笹ヶ棧道南口の六地藏



笹ヶ棧道北口の二尊の地蔵



笹ヶ棧道 左手に椿らしき木

とある。棧道とは前に記したように、木材や縄などを用いて柵のように張り出した道のことである。笹ヶ棧道には地滑りを防ぐために椿が植えられていて、眼下の溪流を隠すほど茂っていたようである。この椿は、『智頭町誌』によれば、天保一三年（一八四二）二月に椿二九〇〇本を植えたと記述があることから、この天保に植えられたものと推定される。昔から道が通りやすいように椿などで整備をし、鳥取から出ていく人、鳥取を訪れる人のために配慮をされていて、無駄安留記の著者がそこに注目していて面白い。また、南口には寛政二年（一八〇〇）につくられた六地藏がある。村にさまざまな災いが入らないよう、「当村若衆中」が記念して建てたものようだ。

実際に、現在の笹ヶ棧道に行ってみると上の写真のように道のふちには椿のような木が茂っていた。道のふちは崖になっていて危険な道のりであった。この道を昔は馬を引いて歩いていたと考えるととても危険で、大変だったことだろう。しかし、棧道から見える景色は見晴らしがよくきれいで下を見れば川も流れているので、無駄安留記の著者は風景も楽しみながら歩いたのではないだろうか。

② 赤松棧道

続いて赤松棧道についての調査結果を報告する。赤松棧道は用瀬から少し上がったところにある。『因幡・伯耆の町と街道』（中林保、富士書店、一九九七年）によれば、赤松棧道は赤松峰岐とも呼ばれ、峰岐は、歩危の当て字で、歩危は、崖の意味で交通の難所につけられた地名である。四国の大歩危と小歩危は有名である。

また『因幡・伯耆の町と街道』によれば、赤松棧道の下には大きな渕の「椀貸し岩」があり、次のような伝説が残っているようだ。昔大勢の客をもてなすとき赤松峰岐の下の渕に立って、「膳と椀を貸してくれ」と大声で叫ぶと、あくる朝、この岩の上に希望しただけの膳と椀が用意されていた。そのまま持ち帰り使って、夕暮れに、礼を言って岩の上に置いておく。翌朝行ってみると、膳と椀はすっかりなくなっていた。村人はこの渕の底が竜宮に通じており、膳や椀はそこから出てくるのだと信じていた。あるとき、膳や椀を借りていた村人の一人が椀を返さなかったところ、その後いくら「膳と椀を貸してくれ」と大声で叫んでも、膳と椀は出てこなかったという。以上のような伝説が赤松棧道に残っている。また赤松棧道の用瀬側に一里松があった。鳥取から五里（約二〇キロ）の標で、慶長九年（一六〇四）二月に植えられたと伝えられている。

実際にその赤松棧道の場所である用瀬発電所付近を訪れてみたが、今では草が生い茂り、道がどこなのか特定することができず、とても残念であったが、当時の人はこのような険しい道を歩いていたと推測できた。

（寄能 千明）

駒帰阪

駒帰阪（無駄安留記では「坂」ではなく「阪」と表記されているため、本文ではこれに従う）は、鳥取県と岡山県の県境にある駒帰から西粟倉村へ越す峠のことで、現在では志戸坂峠という呼び方が一般的となっている場所のことである。この峠は他にも、人見坂、鹿跡御坂（しとのみさか）又は「ししとのみさか」などの呼び方がある。

駒帰阪という地名の由来は、かつて武内宿禰が因幡国の賊を平定するためにこの峠を越えようとしたところ、あまりに険しい山道のため彼の名馬でも登ることが出来ず、あきらめて引き返し、但馬との国境の戸倉坂から因幡国に入国しことから、馬（＝駒）でも引き返した難所ということで駒帰阪と言う名が付けられた。また別に、かつて佐治郷余戸の城主山内四郎左衛門と、佐治村刈地に城を構えた開拓者佐治四郎が領地を巡って争い、ついには佐治四郎が山内氏を滅ぼした。山内氏は名馬を数多く所有していたが、滅ぼされてからは馬の世話をする者も無く野放しになっていたため、佐治四郎がこれをつらえようとしたところ、馬達は逃げてしまい捕まえることが出来なかった。ただ一旦は逃げた馬達も、駒帰阪まで行くとそこを越えることはできず、引き返してきたことから、馬でも引き返した急な峠という事で駒帰阪と名付けられたという話もある。内容は異なるが、この二つの話はどちらも駒帰阪の地名の由来が、馬が登れずに引き返した急な阪という点で一致しており、当時の人々の間で険しい山道であると認識されていたことがうかがわれる。

無駄安留記の駒帰阪（図1）

を見てみると、本文は無く絵のなかに「智頭郡 駒帰阪 是因作国界」と、場所、地名、そして因幡国と美作国の国界（境）であることが書かれているだけであり、無駄安留記当時の様子は、絵から想像するしかない。絵に描かれた駒帰阪は、山に沿って曲がりくねった細い道で、笹ヶ棧道のように谷側の柵も無いだけでなく、樹木も少なく山肌が剥き出しになっているため、がけ崩れなど、非常に危険な道であったことが推測できる。また、絵には四人の人物が、それぞれ荷物を背負ったり、天秤棒を担いだりしている様子が描かれているが、杖をついていたり、馬は描かれてないことから、やはり無駄安留記の時期も、地名の由来となった説話の平安時代から変わらず、馬が通ることは難しいほどの険しい道だったことがうかがわれる。

このように当時から難所として知られていた駒帰阪が、同じく難所と言われていた笹ヶ棧道と共に無駄安留記で取り上げられたのは、駒帰阪が国境と言う重要な場所であったこともその理由だと考えられる。



図1

国境としては、平安期から国司が因幡国に入る際の、境迎えという入国の儀式が駒帰阪で行われていた。これは新任の国司が京都から任地の国境に到着したときに、在地の国府の役人が出迎えて供応する儀式のことで、駒帰阪で行われた境迎えの儀式については、承徳三年（一〇九九）二月から四月にわたって、因幡守として国府（現在の鳥取市国府町）で政務を執った平時範が記した『時範記』の中に見ることが出来る。

『時範記』の中では、美作国の境根（現在の岡山県英田郡西粟倉村境根）に到着した平時範の一行は、まず、因幡への入国前に駒帰阪の因幡国側に控えていた因幡の在庁役人達へ使者を派遣して、境迎えの儀式に関する慣習を確かめた。そして翌日、束帯と帯剣で正装し、黒毛の馬に乗り駒帰阪へ向かう。駒帰阪の頂上手前になると時範は馬を下りて頂上に立ち、峠の因幡国側に並ぶ在庁役人たちの前を、時範が持参した因幡国の神社に奉納する宝物、下役を引き連れた時範の順に入国した。最後に、官職・姓名を名乗る在庁役人達に、時範が会釈を返して、境迎えの儀式は完了となる。

同時に、駒帰阪は両国追放となった罪人が見張りの町御目付けや警固足輕（あしがる）に最後に見送られる場所でもあった。両国追放とは、因幡国、伯耆国の両国から追放される刑のことで、鳥取藩における追放刑の中で一番重いものである。追放刑は、追放人の代理が申し渡しを受けるとその日のうちに、武士であれば町御目付け、武士以外であれば警固足輕によって国境まで見送られ、そこで追放された。

駒帰阪で行われた両国追放の様子は、『飯田秀雄自筆「秀雄四十二際厄難荒増」』『御役所向諸日記』（『無駄安留記隊報告書二〇一〇』）にもみることが出来る。これによると、天保三年（一八三三）九月一三日、両国追放の申し渡しを受けた飯田秀雄は、即刻、垂れ駕籠でお付きの足

輕二人によって駒帰阪へ送られ、そこで追放されたとあり、実際に駒帰阪が国境として、両国追放の際にも重要な役割を果たしていたことが分かる。

駒帰阪は智頭街道に含まれており、鳥取藩の参勤交代道としても利用されていた。来見田博基『鳥取藩の参勤交代』（二〇一二）によると、鳥取藩の参勤交代は江戸時代の二六四年間で九〇回余り行われたが、その全てで駒帰阪を通っている。駒帰阪は国境であるため、参勤交代の際にはここで役人たちが藩主を送迎しており、代々の藩主たちも帰国の際には、この地の役人に領内の様子を確認していた。さらに、江戸からの長い道のりの最後の難所であり、ここを越えると鳥取藩の領内に入るという場所でもある。初代藩主の池田光仲も死去する二ヶ月ほど前、最後の帰国で駒帰阪にさしかかった時には、側近にこれまで参勤交代で何度も見た駒帰阪からの景色も見納めだと語ったという。この事からも駒帰阪は藩主たちにとって特に印象深い場所であったと考えられる（図2）。

鳥取県と岡山県との県境にあるこの峠には、無駄安留記に描かれている駒帰阪の古道、昭和九年に作られた旧道（志戸坂隧道）、昭和五〇年の志戸坂道路（現在の国道三七三号線）の三本の道が通された。しかし現在では、古道だけでなく旧道も廃道となり、国道三七三号線以外はほとんど使わ

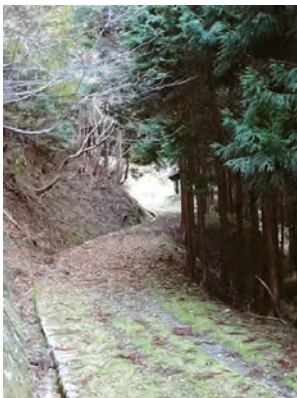


図2 駒帰阪古道

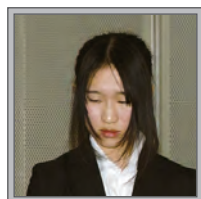
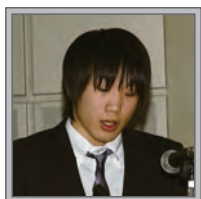
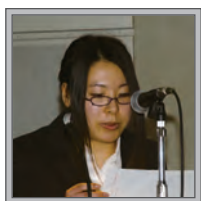
れることも無くなった。あまり知られていないが、古くからの駒歸阪の古道は、現在も保護、維持され、宿場町であった智頭宿までの約一八キロメートルは、文科省の歴史の道百選にも選定されている。実際、現地には天候の回復を待って一月中旬に足を運んだが、当時と異なる部分は、峠の途中に休憩所が設けられていることや、石垣や頂上付近の木製の階段が整備されたことくらいで、ほぼ無駄安留記当時のまま残されているのではないだろうかと思った。

(奈須 卓也)



調査の記録





地域文化調査発表会

【開催日】2014年1月25日(土)

【場所】とりぎん文化会館第一会議室

